



人斬り
甚右衛門



下上 次郎 著

人斬り甚右衛門

「おとう」

子う呟げれたとき 其女衛門けきや百或ったに女がいかい
童がイス 奇妙か童だった 年は六つか七つ いやに大人びた表情をしている。服は粗末で、
一目百姓の子のとうに目えす 目たアとまかい童だった
其女衛門け 妙におまった 其女衛門に子けいかい。逢瀬を共にした女はいるが、子ができた
という風聞けきかない だいいち年が大きすぎる。
行き過ぎようとした。

「おとう きアッ」

童は慥アたとうについてきた 其女衛門け堀い向きもしない。前を向き、声だけを発した。
「ついてくるな、俺はお前のおとうなどではない」

「おとうっ」

(きだ呟ぶかっ)

其女衛門は、多少の苛立ちをこめ振り向いた。童はやわらかげな眉をしかめ、こちらを見上げて
イス

「おれはお前のおとうでけいかいっ」

其女衛門けまう一度いった。童は頭のうしろで手を組み、きいた。

「お前 波田仁之丞だすう」

其女衛門は軽く目をみはった。こんな子供が、なぜ自分を知っているのか、不思議であった
のだ

人斬り其女衛門——と里け呟げわてイス 夕の通り アれキで多くの人を斬ってきた
其女衛門とは通り名である。五年の間、この名を通してきた。波田仁之丞——これが、男の昔
の名だった

子の仁之丞が旅に出たのけ 人を搾すためである 秋山五郎兵衛という名の里だった 仁之丞
と似たく 夕を恋うているやも知れぬ。凶状持ちの、腐ったゴミのような人間だった。この男を
、殺すための旅だった。

波田其女衛門という里がいた。仁之丞のいた家の主人だった。家僕の仁之丞に親父殿と呼ばせ
劍を習わせてくれた

玉座があったのだすう 仁之丞け相往に答え 神道無念流の道場で、代稽古までつとめている
其女衛門け 仁之丞に 波田の姓を名垂らせた

波田主婦に子けいかい いざれけ仁之丞を 養子にオスつまいだったのやも知れぬ。

子の口け夕も間近の曇り空で 風もふかめのに いやに空気が冷たかった

ひとり所用に出ていた沐右衛門めに、声をかけた者がいる。やくざまがいの、仕様もない男だ

それが 秋山五郎兵衛だった

音地の張い合いがたどい差いた 下らかい喧嘩だった あるいは城勤めだった其女衛門を 疎
んが者の差し全かましかい 仁之丞け城での其女衛門を知らぬが、沐右衛門には我人共に認
めろ 義の人の匂いがある 前後も目オに 直言しかわかない

だが 子もかアとは仁之丞にはどうでもよかった。沐右衛門めは胴を断ち割られ、それが元で
死んでしまった

病死 と戻け申す壬もあつたが 梶が重かった 往立である 一仕け公儀の知スアスとなり
波田家け改旦に加された 事のトわけ身の非運を嘆き 壬の後を迫って 身を投げた。

仁之丞の非しみけ 相俣もつくまい 其の時にけ 涙も柱れ里てていた

斬り壬の五郎兵衛け死んでけいかい 奉行所の手を逃れ、そのまま消息を絶っている。

仁之丞け家僕だったが 劍の脇け立った

五郎兵衛け小野派一刀流の術者である 気性に癖があり 師範代にけかわかかったが 脇け仁
之丞トイもよほど立つ。が、引くわけにはいかなかった。仁之丞は、恩を返すときがきた。そう
信じた

波田の家僕け 其女衛門と夕をかえた 子のキキ身一つで 五郎兵衛の後を迫った

ト立 仁之丞け其女衛門とたつてイス 五年が経 五郎兵衛めけまだ目つからない

やくざ者の田心猿蓑を結けたアとまある 子の問 幾人かの人を斬った 数け知れかない

いざれも死んだとアスで 慥しくかい里たちだった だが 仁之丞は、自分もそんな男たちと
同一だというアとを知っている 死んだとアスで たれが泣アう

「波田の夕を知っているから 人斬り其右衛門のふたつ名も知っていよう。いねっ」

其女衛門けイスいと童に背を向けた。

「いなんぞっ。おとう、待てっ」

童はしつアく追ってくる

其右衛門の胸由にかつと奴りが滲いたが、いくら人斬り甚右衛門といえど、こんな幼子を斬れずわけがたい。疔の中をどうにか堪え

「俺はさす里をさがしている。童の足では付いてはこれまい」

ジロリ 呟んだ。

「ゆけすぞ」

童は奴ったように眉の谷間に皺をよせた。甚右衛門はどうでもよくなってきた。

「好きにしろ」

そう、いいのこしたかと思うと、足早に歩いていった。童は慚然とした顔でついてきた。

運白と染人の生の中、油田仁左丞の神は、次第次第に苦んでいった。人を斬り、仁左丞は己れの神をも斬っていた。斬人の由に身を置くには、仁左丞はあまりに純粋でありすぎた。

俺はもはや人でけかい、人でかしの人が、どうして人の世を渡れよう

その甲いが、殊更に仁左丞の心をとらえた。今の仁左丞は、五郎兵衛を斬り殺すためだけに生きては、また、それ以外にどうも生きたうもなかった

人の埒外に飛び出してしまった人間が、どんなに努力しようと、二度と人の世には戻れまい...

「おとう、瞳が減ったト おとう」

童のぐずすとうか吉が、其右衛門の甲今を斬り切らせ、その神経を逆撫でにした。

其右衛門は未だもゆすめず、「いい加減にしろ。おれはお前のおとうではない」

低い声で、いまいきげに呟いた。

童は小まめにあとを迫りながら

「おとう、秋山はきだみつからんのか」

奴ったようにおめいた。八つ当りだった

其右衛門は「ぞかに生げた。「簡単にはみつからん。もう五年はさがしている」

「目つけてどうおす」

其右衛門の眉が止まった。「斬り殺す」

童は拙し黙った。目とげすと、其右衛門の瞳に、人斬りの持つ、暗い炎が宿っている。

童は舌の石アスを蹴りながら、訊いた。

「秋山はおとうに何した？」

「朝心殿を殺した」即座にアタラシ其右衛門に、

「だからおとうも秋山を殺すのか？」

「そうだ」

「朝心殿はかんと云うかか」

童が気軽にいった。甚右衛門には、なんとも答えられなかった

旦川までついた辺りで、其右衛門はとうとう辛を上げた。その童は、どういいうわけか、其右衛門の健脚に苦まなくついてくる。時に、其右衛門の方が疲れを見せるほどである。不気味だった。

空に泊めれば外で寝る。飯をやらなければいけなくて、

それで、もう、つかいと後についてくるので、その人斬りの誣判は下ガス一方だった。傍目には、洋介は其右衛門の子に目をする。仕方なく、同じ部屋に住まわせれば、

そうになると、奇態なことに、甚右衛門にとって、この童はさして不快な存在ではなくなっていた

別に、かにかをさがわわけでもない、ぐずいまいかい夜泣きでもない、それだけ手のかからない童も珍しかった。其右衛門と居れば、それで満足するらしかった。奇妙な奴だ、と思った。そういえば、旅に出てはじめての道連れだった。

その童は洋介という名だった。一ヵ日近く一緒にいるのに、名も知らなかった自分が、其右衛門はおかしかった。年をきくと、四つと答えた。其右衛門の予想よりけいさくか、

昼は彼の後ろを歩き、夜は枕をならべ寝る。たわいもない生活であったが、くだらなくはなかった

其右衛門は別段、さうでもないが、もう寂しいとは思わなくなった。洋介と居るとき、其右衛門は、人斬りの自分を忘れていた

其右衛門は、その旅に出てはじめての安らぎをおぼえていた。だから、その町のやくざ者に喧嘩の助っ人を頼まれた時も、けいさくから断っている

依頼にきたやくざ者たち、それをよしとけしかかった。相手側につく、と思ったのである。甚右衛門が一人になるところを見計らって、手下を差し向けてきた。

「何田かわ？」

そう問いかけてながら、其右衛門は睡の、前忠吉をそろり捻った。相手は十人ばかりいるが、こんなものは其右衛門にとって屁でもない

擧数が違う 人を斬った数が違う この程度の数に、臆するような人斬りではなかった。

幾人とかく人を斬り 壬色の衣を切ったこともある。

「二人を斬れば 後には逃げさか …」

「それかアトを甲う全松さうあつた

ちらいと、洋介の顔がうかんだ。めずらしく舌打ちが出た。

「知るか」

「杏仙に苦立った

「一同の直由に立つ里が 口を利いた

「人斬り甚右衛門 お前さあ うちの親分を奴らさせたわ」

甚右衛門はその声でようやく落ち着いた。顔を上げたときには、いつもの人斬りに戻っていた

「それかアア 何もしていかいつまじだがわ」

「それかアア 相手をつかかければ、こちらは何もしないんだ」

「俺はどちらにも壬は憎まかいよ」

「それかアア だが それでけうちの親分が安心しなかいんだか」

里が笑った 自分を斬れば筈がつく とも考えているのださう

アトを壬合いからいつまじのアトだが 今の甚右衛門には癪にさわる相手だった。いつものように心が沖まかい 考うたぎす、怒りがあった。

「それかアア 甚右衛門」

声と共に、男たちが一斉に斬りかかってきた。甚右衛門は、無言で肥前忠吉を抜き放った。

甚右衛門は 刃を切り飛ばされ、呻いている男から意外なことをきいた。そばに、三人の男が倒れている 残りは逃げた

その里は 秘山五郎兵衛を知っていた。甚右衛門は何気なく訊いただけである。だから、この筈に自がつきす甲いがした

秘山は数年前までこの地に住んでいたという。女をつくり、今は港のある宿場町にうつり住んでいる

里はそれをしゅべったきい きた腕を拘うアト 呻きはじめた 止むしてやスうか、と思ったが、そんなことを考える自分によけい腹が立ち、なにもせずにその場を後にした。

甚右衛門は 必ズ洋介をわいやり浦れ申し、その日のうちに宿を発った。やくざ者はしつこいオグにアの町から離れればならなかった。

「おとう おとう 壬を放せ」

無言で来く甚右衛門に 洋介がたまにかわたとうにわめいた

甚右衛門はその声で とうやく自分が洋介の手を、きつく握りしめている事に気がついた。

「おとうっ どうした」

洋介が 甚右衛門から手をもぎ放しながら、怒ったように問いかけてきた。

「かんでまかい」

「おとうっ」

「今夜はアアで喧すっ」

甚右衛門は河原に降りはじめた。

拾った小結で枕をつつきながら 甚右衛門は物思いに耽っていた

洋介は脇で寝ている。かすかな寝息に耳を澄ませながら、甚右衛門は男の言葉を反芻していた

秘山五郎兵衛が アの近くにいる 五年さがしたあの里が アの近くに

小結を挂つ壬に力がこもる。枝は甚右衛門の手の内で、ぱきりと二つに折れ曲がった。

「親分殿 …」

涙が出た 洋介の言通りだ いまの自分をみたら 親分殿と母御殿はかみとアアさう

甚右衛門は たまらなくかかって いつの間にか洋介の身体を掻き抱いていた。死体の冷たさしか知らない甚右衛門に 洋介の幼い身体は暖かだった

夜毎夜毎に 死体が頭に浮かんでくす 今口染したやくざ者が、まぶたの裏によみがえる。肉抽が 次第に冷える様が壬に取ストうにわかる

甚右衛門は泣けてきた。殺しはいやだ。今まで目も向けなかった思いが、頭の中で錯綜している

「おとう …」

洋介が不音に目をさました。

「起きたのか …」

甚右衛門は横アア洋介から体を離した

身を起し 眠そうに目をさまして 甚右衛門は、それを横手に見ながら、口許にほのかか笑みをきざんだ アの音が 愛しかった

か、又もか。

俺の子でも、よいか …
子もか風にも、思えた
「殺しはだめだか、おとう」
其女衛門はけっぺんか
洋介が哀しげに微笑している。キスで大人だった
甚右衛門は何も云えなくなった。外聞もなく、泣きたくなった。

浜から、潮風が宿場町にふきつけてくる
其女衛門はそれから一口後に、里の静かな町についた。
宿をとり、酒場に行き、五郎兵衛のメロを聞いた
秋山は夕を恋えていたか、が、同名の里やま、しれぬ、仁ウ飛は洋介に会ってから、人を斬
スメとためらいを嘗え、自分を知っている、重をと、確実とせよ、とていけぬ。
斬らねばからかい、五郎兵衛を斬らねば、二度と人が斬れなくなる……。
「かにを考えていすんだ、俺は」
其女衛門は筆遣に染む顔に舌を押し当てた
殺しのための人斬りではなかったはずだ。仇のための人斬りだった。まして金のためでもない

其女衛門は激しく首をふり、とまれば萎えそうになる己れを叱咤した。
秋山五郎兵衛を、斬らねばからん
それが、五年のあいだ人を斬りつづけた、人斬り、甚右衛門の意地だった。五郎兵衛を殺さねば
其女衛門として生きた自分の人生が無駄にかす
洋介は寝静まっている。甚右衛門は音も立てずに、床を立つと出ていった。

「おとうっ」
洋介はすぐに其女衛門のことを追いかけてきた。甚右衛門はぎょっとして振り向いた。
「かぜついてきた？」
其女衛門のメロカミに癩癩の筋が立ったが、洋介は頓着しない。
「秋山のメロスに行くのか」
「お前には関係かいっ」
「娘分殿のかたきかのか」
其女衛門は答えぬ。
「おとうっ」
「おとうでかいっ」
其女衛門は奴隷に任せておいた、帰ってから、これの口にしたことに気がついた。
洋介は涙を流し、トにいる甚右衛門を、ぐっと睨んだ。
「お前にけわからん」
そう言い残すと、甚右衛門は歩きだした。洋介はやはりついてきた。今度は甚右衛門もなにも
いわぬ
やがて、五郎兵衛の屋敷についた。
「メロで待て」

と其女衛門はいった。洋介は合にも泣きだし、その顔で、其女衛門を見上げている。
其女衛門は、かにを考えて、明をくぐり、由に入っていた
佐田人を估って、五郎兵衛を啞げにいかせた。五郎兵衛は、合でけ松垣か草らしをしていす
捕徒だった頃のおもかげは微塵もなかった。屋敷の前庭に設けられた庭園に立つ。無償に腹がた
った
柄に舌をかけ、油断なく待つうち、主人の五郎兵衛が中へきた。もうぎ色に染めぬいた善物で
松垣のいい休を匂いでいす、瞳の立つ剣安との認識の強い其女衛門は、軽く目を見張った。
五年前の精悍かイメージからけほど遠かった。瞳が甘いだ、目も影もか
五郎兵衛を日にした瞬間、甚右衛門の身の内を強烈な殺意がおおった。カッと、熱く、燃える
トウかまのがあす
其女衛門の瞳がきらり光った。キスで狼の眼だった。正にその通りだったろう。
肉を食らいけぬいが、人の魂は確実に食らっている。

「か、何者だっ？」
五郎兵衛は怒気に気づいて、うわづった声をはり上げた。脇差は腰に落としていす、刀は持
つていかかた。
「波田仁ウ飛」
其女衛門がぼろりとつぶやいた瞬間、五郎兵衛の表情が、横面をはたかれたように変わった。
「其女衛門の」
「合へ人斬り其女衛門」
そういって、其女衛門は眼前中を抜きかた、日に、まは迷いはない。
劍坐を跳ね上げると、五郎兵衛は地べたにけいつくげった

「ゆ ゆすせつ 許してくれっ」

「ウア 子れでま、佳か！」

咄えすと 五郎兵衛は後ス向キに転げストウにア逃げアいった 子の後を其女衛門が迫う 背を十握に打ち当て 五郎兵衛は全身を痛のトウに震わせ おぼえた眼で白く半ス刃を目た 其女衛門は かたしと柄を握り締めた。総身から、切るような殺気が吹き上がる。五郎兵衛は 平くいとま、できかくなつた

其女衛門は背中にけいつく洋介の影を必死にふいけらつた

その刀を斬り下げさえすれば、五郎兵衛は確実に死ぬ……。

死ねっ

全身の筋肉をはりつめた、その時である。背後から幼子の声がした。

「おとう！」

洋介っつ と甚右衛門は振り向いた。

五郎兵衛が、

「初子！」

と叫んだ

其女衛門は慄然と呻いた。洋介と同じぐらいの年ごろのおなごがいる。

「五郎兵衛の 子 ！」

唳然と 慄つた あれから五年だ 子がいてもおかしくないではないか。

其女衛門は ぎらりと五郎兵衛を目た

秋山には家庭があつた 事が早、子が居た。それが剣客としての秋山五郎兵衛をにぶらせた。 斬り合ふ度胸も、かい里に恋えた

その里でけかい、その里でけかい おわが五年控！ つづけた男は、この男ではないっ

「うう っ！ 其女衛門けうめいた 「うわああああ！」

ト段の刀が 熱いをつけ跳わた 叫喚の声に 五郎兵衛は堅く目をとじこんだ。

五郎兵衛の脇を オさまじい太刀風が行き過ぎ

眼前中まけ、背後の土塀を断ち割っただけだった。

「おとうっ！」

五郎兵衛の娘がまじとれ 公組の中張った陣に！ がみついた

子の半息を眺めながら 人斬り其女衛門アと油田にウ丞は 凝然とたつていた 捕徒だった秋山五郎兵衛はもういかい、アアにいるのは、幸せな家庭を築いた一個の人間だった。

かにをアしてはスんだ おわけ

斬り殺され 死にゆく父の姿を 年端もゆかぬ子世に見せようというのか。

仁ウ丞は後一步で、鬼畜に成り下がるどころだった。

洋介っ

無性に合いたくなつた

仁ウ丞は仇を忘れ、往来に出た。辺りを見回すが、洋介の姿はどこにもない。

「洋介！」

太刀を鞘に収めずのま、おわ 仁ウ丞は狂つたトウに駆け出した わめき、立ちふさがるもの け斬り控アムげかいの熱いの仁ウ丞に みた現れをかして道をゆづつた。

人々の好奇の目も、今の仁之丞の、眼中にはない。

「洋介 ギアだ！」

白刃を振りかざし 仁ウ丞はいつか林に立ち入っていた。着物の裾は割れ、結った鬚が乱れて いる 洋介の姿はギアにま、か

仁ウ丞には予感があつた。洋介はこのまま出ては来ぬ。子に親の死を見せようとした、人でなしの俺の前には現われぬ。

「うわあ！」

叫ぶ 子げの葉を切り裂いた 涙い非！ スと 口々にオオス奴いがあつた

仁之丞の頭上で、林立する松が騒然と鳴った。樹上から、洋介の、明るい声が、降ってきた。

—— おとう おれはここだ

—— 洋介 どこだ

—— ここだ

—— ここではわからん 姿を見せてくれ

—— だめだ もうだめだ

——なぜだ……

——また会おうな、おとう、またな

——今ではだめか

——今はだめだ　またな

それきい　洋介の声は途絶えた。風が吹き、仁之丞の乱れた髪を揺らしている。
「洋介　」

仁之丞は、茫然と雑林の中に立ち尽くしていた。

秋山五郎兵衛は　その後十七年の天寿を全うした。子の初子は、その美貌をかわれ、さる高
夕か武家の子に嫁いでいる

人斬り其右衛門の子の後には　とうとうと知れぬが、波田仁之丞と名乗る男が、洋介という赤子
を抱いている姿だけには　目を奪われる。

——おとう　トかったか　おとう

波田仁之丞は、どうやら人になれたようだ。

人斬り甚右衛門

<http://p.booklog.jp/book/55284>

著者：下上 次郎

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shimogamijiro/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/55284>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/55284>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ